

岩瀬文庫蔵奈良絵本『住吉物語』の位置づけ

鹿谷 祐子

はじめに

愛知県西尾市岩瀬文庫には、奈良絵本の『住吉物語』が二種類所蔵されている。濃紺色表紙半紙本横本（函番号一一一八四）および、浅葱色表紙半紙本横本（函番号一一一七四）である。後者は本文が整版本とほぼ一致しており、版本をもとに制作されたと考えられる。本稿で取り上げようと思うのは、前者（以下「岩瀬本」と略称）である。なお、岩瀬本の全文の翻刻は、鹿谷祐子・石川透「西尾市岩瀬文庫蔵『住吉物語』解題・翻刻」（『古典資料研究』16号、二〇〇七年十二月）を参照されたい。

『住吉物語』の諸本は百を超えるといわれており、和歌の数によって六類に分類する桑原博史氏の分類と、十八種の代表本文と参考本文を掲げる友久武文氏の分類が一般に行われている。岩瀬本の和歌は四一首であり、桑原氏の分類では第三類に属している。また、友久氏は諸

本を略本・流布本・中間本・広本に分類しているが、岩瀬本は「類本を有しない零本のたぐいや、性質をじゅうぶんに把握しえず、代表本文として立てるに至っていない種類を一括した」「参考本」のひとつに挙げられている。

岩瀬本上冊は大阪府立中之島図書館蔵奈良絵本零本（請求記号 甲和八〇六Ⅱ、以下「中之島本」と略称）の本文を省略したような形である。省略は物語の展開に影響を及ぼさない範囲であり、一読して矛盾をきたさないように行われている。また、中冊の半ばほどまでは大東急記念文庫蔵伝一位局筆本（以下「大東急本」と略称）とも祖本を共有していると思われる。これ以降は成田本のような本文をもとにしているが、他本とは異なる表現が多く、和歌の語句にもさまざまな改変が見られる。

このような岩瀬本は、改作末流本として、従来考察の

対象とされることが少なかった。しかし、見方を変えれば、同時代的な作品として『住吉物語』を發展させていると言え、近世における自由な享受のあり方をうかがい知る貴重なテキストと位置づけられる。

一、書誌

まずは岩瀬本の書誌を記す。

写本。袋綴。半紙本横本三冊。縦一六・九種、横二四・一種。上冊二八丁、中冊二五丁、下冊二五丁。原題簽中央無辺「すみよし 上(中・下)」(金泥下絵入り、摩滅あり)。原裝濃紺色表紙、草木・寺院・霞等の下絵入り(金泥手描)。近世前期写。本文料紙は間似合紙。半丁二三行、各行に空押の罫線あり。挿絵、上冊片面九図、中冊片面一〇図、下冊片面八図。各挿絵の紙背に、上冊「上の(九)」、中冊「中(の)一(十)」、下冊「下の(八)」と墨書あり。下冊一三三丁裏の紙背にも「下の五」と墨書あり。

岩瀬本の挿絵は極彩色の古拙なものである。金や銀で、衣装や調度の模様が描かれており、天地の霞は、主に桜色と水色で塗られている。各図の概要は次の通り。

上冊(中納言・母宮・姫君などの団欒の様子／姫君の前

に少将の文が広げられ、侍従と筑前が控える／筑前に文を手渡す少将／三の君のもとを立ち去る少将／嵯峨野に遊ぶ姫君たちと、垣間見する少将／格子の陰で立ちながら、侍従に姫君への恋心を訴える少将／乳母を見舞い、泣き悲しむ姫君と侍従たち／几帳の陰で琴をかき鳴らす姫君と、少将に應對する侍従／西の対に佇む少将)

中冊(少将に姫君の言葉を伝える侍従／喜び合う継母と

むくつけ女／入内中止について侍従に尋ねる少将／住吉の尼君に文を届ける小童／姫君を見舞う中の君と三の君／上京した尼君と語り合う姫君・侍従／姫君の書置きを顔に当てる泣く中納言など／住吉での尼君・姫君・侍従／中納言家の端者に文を渡す小童／出家しようとする中納言を引き止める従者)

下冊(徒歩で住吉を目指す少将と従者／簀子に腰を掛ける少将と、應對する尼君・侍従。部屋奥に姫君

が控える／遣り戸越しに歌を詠み交わす姫君と少将／少将は姫君と契りを結ぶ／舟で住吉をあとにする少将と姫君たち。遠くに松林が見える／少将の若君・姫君の袴着。中納言は腰結いをつとめ、

姫君と侍従が几帳の隙間からこれを見る／再会を
喜び合う中納言と姫君たち／繁盛する少将一家の
様子

挿絵について問題点を二点指摘しておく。まず、下冊
第六図、住吉から帰京した姫君と少将の間に生まれた若
君・姫君の袴着の場面で、ふたりの子どもがどちらも女
児の姿で描かれており、不審である。兄妹の順序が入れ
替わり、真銅本系統の伝本で「姉弟」となっている例は
あるが、ふたりの子どもをどちらも女子とするものはな
い。直前の本文に「さても若君姫君、二人なから出し参
らせたれば、世にたくひなくうつくしくそおはしける」
(下16ウ)とあるように、本文には若君・姫君と明示さ
れているため、『住吉物語』の内容に詳しくない絵師が、
「若君」を女子と解釈したのかもしれない。

また、少将の顔に髷が描かれているものと、ないもの
とがある。少将がはじめて画面に登場する上冊第三図で
は髷があるが、第四図には描かれていない。しかし、第
五図では再び髷がある姿で描かれており、第六図には髷
がない。これ以降は一貫して髷がない姿で描かれてい
る。

このほか、岩瀬本の挿絵は女性の髪の毛の描き方に特徴が



岩瀬本下冊第六図



髪部分の拡大図

あり、顔に髪が網の目のように縦横にふりかかっている。中之島本の挿絵はこのように描かれておらず、岩瀬本の挿絵を担当した絵師または工房の特徴と考えられる。

二、中之島本からの省略

桑原氏により指摘されているように、岩瀬本上冊と中之島本は、挿絵の数や挿入される位置が一致しており、構図も似ている。また岩瀬本の本文は、中之島本から和歌一〇首を含む相当量を省略して成立したようである。^(注5)ただし、漢字のあて方などは異なっている。

中之島本は一冊のみの残欠本であり、三冊本の上冊と見られる。縦一七・二纏、横二四・七纏と、岩瀬本より若干大きい。丁数は三六丁、半丁一六行で書写されている。挿絵は片面九図。表紙は改装である。改装の際に誤って、「むさし野のくさのゆかりとのたまひつれなをくはちすのゑんにひかれたまふへしとうちわらひたまひてせうしやうはかへりたまひぬ」という本文を持つ最終丁が、本文の書かれた面を内側にして、前表紙見返しに貼付されてしまっている。^(注6)

中之島本の和歌は三五首であり、岩瀬本上冊の一・四倍となっている。単純に計算すると、完本であったなら

和歌の総数は五七〇五八首となる。桑原氏の分類では、中之島本は岩瀬本と同じく第三類に分類されているが、第五類に相当するような、和歌の量も本文の量も多い本であったと考えられる。

物語の冒頭付近では、岩瀬本と中之島本の本文量に目立った差はない。たとえば、幼い姫君の美しさについて述べた「月日かさなりたまふま、に、ひかりさしそふ心ちしてめてたくそおはしける」(1オ)という中之島本の本文のうち、「ひかりさしそふ心ちして」にあたる部分が岩瀬本には欠けている。また、姫君の母が亡くなる際の「ちうなこんもなきたまひ、われもおなしおやなれは、いかてかおろかにおもひはんへるへき」(2ウ)という中納言の言動描写のうち、岩瀬本には「なきたまひ、われも」にあたる部分がないなど、その差はわずかであった。しかし、物語の展開につれて本文量の開きは大きくなっていく。

左に引くのは中之島本で、少将が三の君と結婚後、姫君の琴の音を聞き人違いに気づく場面である。

いかなる人のすみたまふにか、とおもひてあかしく
らしたまふほとに、あきのねさめの物あはれなるさ
夜なかに、ねやちかくおきのはのそよきわたる風の
おとも、ことに身にしむ心ちして、まくらの下に夜

もすからなくきり／＼すのこゑまでも、その事となくあはれになみたもよおすおりふしに、つまおとやさしきさんのねの、そらにきこへてあり。にしのたいのほとりにきゝなして、三のきみに、「これをきゝたまふか」ととひたまへは、「はしめよきゝはんへるなり」とのたまへは、「いかなる人のひきたまふぞ」ととひたまへは、何のこゝろもなく、「わらはかあねのひきたまひ候」と申されけり。(14オ)

傍線部が岩瀬本には欠けている部分である。二重傍線部の文章を省略したために変えたのである。風の音やおろぎの鳴く音といった情景描写が中心であり、これらがなくとも物語の筋を追うのに支障はない。

全体的に見て、中之島本では少将の心情や行動が詳しく描写されているが、岩瀬本では、それらが省略される傾向にある。嵯峨野での遊びの場面の直後には、少将は姫君の住む西の対へ行き、侍従に対し、筑前にたばかられて結婚してしまった口惜しさや、一言でもいいから姫君の返事がほしい、ということを書いている。中之島本ではこの間の本文は約二四行に渡るが、岩瀬本では「せうしやう、あくかれて又ふみをしゝうにやりたまふ」

(上20オ)という一文にまとめられている。また、姫君の乳母が亡くなり、少将が姫君と侍従を弔問する場面では、秋の月夜、少将が西の対に佇み、何度も姫君に和歌を詠みかけ、ようやく返歌を得るのだが、岩瀬本では、中之島本の約七〇行が省略された形となっている。

このように、岩瀬本は後半になるにつれて、中之島本の本文を大量に省略するようになってゆく。あるいは、岩瀬本が直接中之島本を省略したのではなく、すでに省略した本を岩瀬本が写した可能性もあろう。情景描写や登場人物の心情・行動を詳しく追うことよりも、速やかな物語の展開を重視したようである。

三、大東急本との共通性

中之島本以外では、中冊の途中までは、岩瀬本の本文は特に大東急本と近い^(準)。大東急本は、筆跡について川瀬一馬氏が「古筆家は『飛鳥井榮賀郷息女一位局筆』などと宛てている。むしろ榮雅よりも前のものであろう」と述べているように、室町時代に書写されたと思われる伝本である。

具体的な表現を登場する順に見ていこう。少将が筑前のたばかりに気づき、姫君の住む西の対の部のもとを叩いたとき、岩瀬本と大東急本では、応対に出た侍従の言

葉に、「あらしの風のまとうつは」(上15才)とある。諸本では「あやし、誰ならむ」(成田本)などであり、部を叩く音を、嵐の風が窓を打つ音にたとえるような表現は見られない。両本は独自の表現となっている。

また、右の場面の直後に少将が姫君に詠みかけた和歌「つらさにはきえはきえなん白雪の世にふればこそうきめをも見れ」がある。伊藤一男「『住吉物語』和歌総覧」⁽¹⁶⁾には、所収の一九本中、この歌は大東急本・甲南女子大本・中之島図書館蔵文政一三年本の三本にしかない。いずれも和歌の総数が五〇首以上となる本文量の多い伝本である。さらに、他の二本では初句が「かかる身は」と異なっているが、岩瀬本と大東急本は一致している。

この後、嵯峨野で中の君によって詠まれた和歌「我宿におとつれ来ぬるうくひすのこゑするかたになかぬしてまし」の第二句は、他の多くの本では岩瀬本と逆の意味となる「まだおとつれぬ」であるが、大東急本のみ、岩瀬本と同じ形である。ただし、野辺に長居しようとする理由としては、諸本のように、我宿に「まだおとつれぬ」驚の方がふさわしい。

そして、継母の讒言によって姫君の入内が中止になった後、中納言が新たに用意した結婚相手について、岩瀬本は「大政大臣にてうせ給ふ人の御子に、さいしやうに

てさへもんのかみかけたる人、御とし廿はかりにおはします」(中7ウ)とする。諸本では、「太政大臣」は「内大臣」、年齢は二十四、五または二十五、六歳となっているものが多い。ここでも、大東急本のみ岩瀬本と同様である。岩瀬本や大東急本では、諸本と比べて、結婚相手の父親の官位が高く、相手自身の年齢は若くなっているのであり、姫君にとってはより理想的な結婚相手、少将にとってはより強力なライバルとなっている。

この結婚話を妨害するため、継母とむくつけ女によって「世におそろしけなる」翁に盗み出されそうになった姫君は、住吉に住む亡き母の乳母であった尼君に助けを求める。このとき、岩瀬本では「し、うか母のともたち、おとわかとてこわらはのあるか、よくしりたる」(中9才)者が、尼君に文を届けている。大東急本にもほぼ同様の記述があるが、他本では「侍従が母のもとにありける女の、よく知りたりける」(成田本)などと表現されている。「おとわか」という名は、岩瀬本と大東急本以外では、陽明本の別の場面に見られるのみである⁽¹⁷⁾。なお、岩瀬本の挿絵では、「おとわか」らしき人物が女ではなく男の姿で描かれている(中冊第四図)。

諸本の中で最も叙述量の多い部類に入る真銅本を参照すると、姫君と少将が儲けたふたりの子どもに、「ひめ

まつの君」「わか松の君」という名が与えられている。また、一般的に奈良絵本には、画中に詞書には登場しない女房などが描かれ、名前とセリフが与えられていることがある。彼女たちは自在に語り、詞書だけでは描ききれない物語世界を補充している。このことを考え合わせると、脇役の人物に特定の名を与えることは、本文を増補してゆく過程で、物語にリアリティーを与えるために行われた措置だったのではないだろうか。

岩瀬本と大東急本の表現には、冒頭付近を中心に異なる部分も少なくはない。しかし、本節で確認したように、諸本の中では近い関係にある。大東急本からの直接的な影響は想定しがたいが、住吉への下向の前に、姫君と侍従が中の君・三の君に別れを告げる場面(中10ウ)までは、同系統の祖本を共有していたと考えられる。

四、中冊半ば以降の本文について

さて、中冊半ば以降の本文を見ていく。中・下冊についても、上冊同様に省略本の特徴を持つと考えられる。

たとえば、中将への昇進についての記事のないまま、少将は下冊冒頭で突然「さる程に、九月はかりに中将はつせにこもり給ひて」と、「中将」として登場している。また、ほとんどの伝本に含まれている「たづぬべきひと

もなきさのすみのえにたれまつかぜのたえずふくらむ」と「すみよしのまつのごずゑやいかならむとほごかるにもそでのぬるらん」(成田本)の二首を、岩瀬本は欠いている。^(注1)前者は、住吉にたどり着いた少将が琴の音を聞いて姫君を尋ね当てる場面で、後者は、姫君や少将が住吉を離れて帰京する場面で、それぞれ詠まれる重要な歌である。このような現象は、親本より本文を大胆に省略する過程で生じたのではなからうか。

中冊半ば以降の本文は、全体的に成田本や藤井本のよくな本文に近くなっている。ただし岩瀬本には、他の多くの本には見られない記事がある。たとえば、次の姫君が住吉へと下向中、自らに「六かくたうのほうし」が通っているという濡れ衣を着せられたように、身に覚えのない噂を立てられた女性を回想するという場面である。

いにしへ、あるきささき、人々、なき名をたてしかとも、御ぬしはしりたまはさりしを、ひたりのおと、つけ申されたりしかは、こうきてんにとちこもり、七日と申にうゑしに給ひけるとかや。又、あるおんな、なき名をたちたりけれ共、人のとかにはなしもせて、これも、むくひありけるつみそとて、山よりおくに身をすて、のりのみちに入とかや。

(中17ウ)

弘徽殿に閉じこもつて死んだ「あるきさき」と、出家遁世を遂げた「あるおんな」について語られている。

この記事は、ほかには筑波大本にのみ見える。「あるきさき」が「五でうのみのきさき」、「あるおんな」が「むかしのけいほ」となるなど、細部に違いはあるが、語られている内容は同じである。岩瀬本と筑波大本は桑原氏の分類では同じく第三類に属しているが、本文系統が近いというわけではない。歌詞の異同が甚だしいので、便宜上他本と区別されたのである。ここから、岩瀬本や筑波大本の成立と近い時期に流布していた説話が、同じように混入した可能性が指摘できる。

また、姫君の失踪後、少将がはるばる住吉へと旅立つ際、隨身をひとりだけ連れて竜田山を越えようとする場面がある。

御すひしん一人くし給ひて、しやうえのなめらかなるに、うすいろのきぬ、かさねてめし、はらくつうちちききて、たつた山こえにゆきかくれたまえは、こゑわつらひ給ふを見て、御供の人々は、なをかへりかねてそはんへりける。(下1ウ)

このように、残りの供の者たちは京に戻りかねている。ところが他本では、成田本に「龍田山こえ行きかくれ給

へば、聞こえわづらひて御とものは帰りにけり」とあるように、少将の強い命令に従つて、供の者はあつさり京へ帰っている。岩瀬本のような行動は、他本には見られない。

ところで、少将が住吉の尼君の住居にたどり着いてから、姫君と契りを結ぶまでの場面は、例外的に岩瀬本の叙述量が諸本の中でも多くなっている。姫君は少将を「あはれ」と思いながら、継母や三の君に憚つてなかなか逢おうとしない。ふたりは遣り戸越しに歌を詠み交わし、尼君の活躍や侍従の導きによって、ようやく契りを結ぶのである。少将と姫君が結ばれるまでに高いハードルが設けられているといえる。この遣り戸越しに歌を詠み交わすという場面は、持たない伝本も多く、比較的珍しいものであることが武山隆昭氏によつて指摘されている。なお、贈答歌のうち、姫君の答歌「つくりけんたくみもなにかつらからんた、そま山のすきをうらみよ」は、上句に異同がある。ただし、岩瀬本と白峰寺本は完全に一致している。

次に、住吉から帰京した姫君が父親と再会を果たす場面を掲げる。

大しやう殿仰られぬさきに、姫君もし、うも、しのひかねてふしまろひこかれ出させたまえり。大なこ

ん、目もくれたましひもきゑて、ともかくものたまはて、しはしありて心をしつめ、姫君はそむきて、し、うにむかひてくときたまふやう、(中略)。し、う申やう、(中略)とてかきくとき申せは、あはれなり。角て大しやう、ひめきみに、はしめよりをはりまでありし事かたりたまへは、姫君、さちやうのかたひらををしやりて、たいめんあり。(下19才)

中納言(引用文中では「大納言」)が少将(同「大将」)に引き出物の古い小桂について尋ねると、たまらず、姫君と侍従が「ふしまろひこかれ出」る。そして、中納言の問いかけにまず侍従が答え、その後、少将と姫君も事の顛末を語り出している。ここまでの展開は諸本にも多く見られるところである。しかし、傍線部の一文によって、すでに姿を現しているはずの姫君が、再び几帳の帷子を押しやつて中納言と対面することになっている。

これについては、次の真銅本のような本文が参考になる。

大しやうあはれとおほしめすところに、し、うは、こゑもおしすなきつ、なみたをおさへまいりたり。うれしきにも、さきたつものはなみたなり。大なこん、し、うにの給ふ、(中略)とてうらみ給へは、し、う申やう、(中略)と、つ、にちかほとも

のこさすかたり申しけり。大しやうも、(中略)と、ありのまゝにそ申しける。大納言は、あまりのあさましさ、うれしさに、とかうの事も給はず。さて、ひめ君、さちやうのはしをしのけて、たいめんし給ふ。

真銅本では、まず姫君と侍従ではなく、侍従のみが中納言の前に姿を現す。そして、侍従・少将が順番に事情を説明し、最後に姫君が几帳の縁を押しやつて、中納言と対面している。岩瀬本が成立する過程で、最初から姫君と侍従が中納言の前に姿を現す本文と、真銅本のように姫君が最後に登場する本文とが、入り混じったのではないだろうか。

おわりに

以上見てきたように、岩瀬本は複雑な性格を持っている。上冊の本文は中之島本を省略したような形であり、中冊半ばほどまでは大東急本とも祖本を共有していると思われる。中冊半ばから下冊にかけては、成田本のような本文をもとに、自由な改変が加えられたことがわかる。

岩瀬本では登場人物の心情や行動の詳しい描写は省かれる傾向にある。一方、中納言が姫君に用意した結婚相

手が、諸本と比べてさらに理想的な貴公子になっていること、少将が竜田山をなかなか越えられず、供の者が帰りわずらうこと、また、住吉に着いてから姫君と契りを結ぶまでに、何度も姫君が拒絶の言葉を述べ、遣り戸越しに歌を詠み交わす場面があることを考えると、少将にとって姫君を手に入れるためのハードルが高くなっており、恋愛譚としての物語を盛り上げていこうとする意識がうかがえる。

岩瀬本の本文や和歌には、ほかにも注目すべき点がある。たとえば、筑前が侍従に少将の魅力を語る部分に「今の御門の御こしうと」（上9オ）とある。ここは諸本では、大東急本に「今の後の御せうと」とあるように、后との関係で表現される部分である。どちらでも三者の関係は変わらないが、岩瀬本のみ独自の表現となっている。また、嵯峨野で姫君たちを垣間見た少将は、居合わせた理由を「我身もこの世にありかたくおもひの心みたれに、此のへにさすらひしに」（上18オ）と取り繕う。不自然ではないが、諸本では嵯峨野の景色見たさに出かけたことになっており、岩瀬本のような理由は特異である。

最後に、和歌について述べる。伊藤一男氏の論文を再び参照すると、岩瀬本には、上句または下句のみ、諸本

と一致するという和歌が多い。また、次の五首は諸本とほとんど語句が一致しない。

・それとなく立かへりなんいと、しく人みのおかにか、るかすみは（上19オ）
・うくひすのこゑをたもとにうつしつ、猶すきかたき夕暮のそら（上19ウ）
・あやめ草あやなく物をおもひねのなかくみたる、心とをしれ（上22オ）

・おきもせずねもせてあかす袖の上におのつからをく秋のしらつゆ（上25ウ）

・おもひきや露のまくらにふしわひておもひのやみにまよふへしとは（中1ウ）

このうち、「うくひすの」の歌は、嵯峨野で三の君によつて詠まれたものである。通常、ここに置かれるのは大東急本の「初声はさもめづらしき鶯の鳴く野辺ならばいざ帰りなん」などであり、「帰ろう」と呼びかける内容である。しかし、岩瀬本では「猶すきかたき」（＝帰りたくない）と、諸本とは逆の心情が詠まれている。

また、父親宛ての姫君の手紙に書かれた「あさかほの」の長歌には、「ましてあた成つゆの身のさえのころへきかたもなし」（中23オ）という部分が独自に増補されている。

岩瀬本は、改変の加えられた末流本として軽視するのではなく、『住吉物語』の享受と発展を考える上で興味深い伝本として、積極的な価値を見出すべきであろう。

注

(1) 桑原博史『中世物語研究—住吉物語論攷—』(一九六七年、二支社)。

(2) 友久武文「住吉物語の諸伝本について」(『伝承文学研究』二〇、一九七七年六月)。

(3) 岩瀬本は野線が引かれていることが特徴であり、行間と四周に、へらで押したような線が引かれている。なお、工藤早弓『奈良絵本』上(一九九七年、京都書院)に指摘がある。

(4) 登場人物の呼称は、「少将」「中納言」に統一した。

(5) 「この一冊(中之島本…筆者注)は、岩奈本(岩瀬本…同)の上冊とその有する内容をひとしくするのであるが、物語の内容ばかりでなく、その体裁、有する絵の数や構図までも一致している」(注1前掲書、一四五頁)。

また、岩瀬本で省略された十首は次の通り。

①しら波のよる／＼ことにたちくれとよするみなとのなきそかなしき ②から衣しての山路をたつね

つ、われはく、みし人にあたへん ③かくはかり

さやかにてらす秋の夜の月みんととも人のとへかし
④とにかくにおもひきえなん秋草の露のいのちもつ
れなかりけり ⑤きみかへりおもふとはしれ露の

身のおきところなき我身はかなき ⑥おもひきや

さやかにてらす月影を又ひとりねのそらにみんとは
⑦こひしなんとおもふ心をいまはた、きみにしらす
るたよりともかな ⑧こひしなはきみかうきなや

立ぬへきはしはしか、れ露のたまのを ⑨むさし
野のゆかりの草の露はかりわかむらさきのなざけあ
りせは ⑩きみかあたりいまそ過行出てみよこひ

するものなれる姿を

(6) 注1前掲書では「本文は(中略)『…私はやすくむかへとらんとちかいたまふさりながら御身は』まで」(一八頁)とあるが、最終丁も存在している。

(7) 注1前掲書でも、「阪奈本(中之島本…筆者注)によつてその祖本を考えると、第五類の大東急文庫蔵写本が、もつとも共通する点が多い」(二四六頁)と指摘されている。

(8) 川瀬一馬『大東急記念文庫所蔵 古写古版物語文学書解説』(一九七四年、雄松堂書店)。

(9) 『東京学芸大学紀要』(人文科学、三九、一九八八年二

月)所収。

- (10) ただし、姫君の父中納言が「さへもんのかみ」であるため、新日本古典文学全集では「左兵衛督」に校訂されている。

- (11) 陽明本及び大東急本では、姫君と侍従が住吉に下る際、「おとわか」をともに連れて行ったとある。岩瀬本を含め、他本では侍従以外の供の者については記載がない。

- 「御ともに侍従、又をさなうより召しつかひける上童の乙若といひけるをぞ具し給ひける。御髪の箱、つねにひき給ひける琴、夜の御衣持たれける」(陽明本)
- (12) ほぼすべての伝本に含まれており、岩瀬本に欠けている和歌としては、乳母が亡くなったあと、姫君が侍従におくる「から衣しての山路をたつねつ、われはく、みし人にあたへん」(中之島本)も挙げられる。これは中之島本には存在しているが、岩瀬本では、前後の本文とともに省略されている。

- (13) 「むかしのけいは人は人になをたちてわか身にしつめともよそのとかはなしもせてこれもむぐひありけるつみなればとて山よりをくにみをすて、まつのとほそにた、ひとりこけのむしろをかたしきてのりのみちに入けるとかや五でうのゐんのささきはいまたくらゐのと

き大臣のをとこなをたちけるかつるにはこうきてんにとちこもりこかれしにけるとかや」(筑波大本)

- (14) 注1前掲書、一四二頁。

- (15) 武山隆昭「諸本展開過程における契沖本の特質」(住吉物語の基礎的研究)一九九七年、勉誠社。

使用テキスト

〔筑波大本〕：筑波大学附属図書館ホームページにて公開されている画像をもとに、私に翻刻した。〔成田本〕：有精堂校注叢書『住吉物語』。〔中之島本〕：マイクロフィルムをもとに私に翻刻した。〔真銅本〕：小林健二他著『真銅本「住吉物語」の研究』(一九九六年、笠間書院)。〔陽明本〕：高橋貞一編『住吉物語』(一九八四年、勉誠社)。〔大東急本〕：マイクロフィルムをもとに私に翻刻し、新編日本古典文学全集『住吉物語』を参照した。

(付記)

末尾ながら、貴重な資料の調査・写真掲載を許可してくださいました、西尾市岩瀬文庫に心よりお礼申し上げます。

(しかたに・ゆうこ)／名古屋大学大学院博士課程後期)